

〈学術研究集会傍聴記〉

第72回日本体力医学会大会 傍聴記

石毛 里美*

Satomi ISHIGE*

2017年9月16日から18日まで、愛媛県の松山大学で開催された日本体力医学会大会に参加した。今回で72回目になる、スポーツ健康科学に関連する研究者及び現場実践者が多く参加する大きな学会であった。演題は口頭発表及びポスター発表があり、発表形式は口頭発表で発表7分間、質疑応答2分間、ポスター発表では30分間の発表時間の中での自由討論形式であった。

私は今回、筆頭著者として口頭発表で「脳卒中者における身体活動量および座位時間と運動機能および精神的健康との関連性 (Physical activity and sedentary time correlate with physical function and depressive status in people with stroke)」という演題を発表した。公式学会での口頭発表を行ったのは初めての経験であり、また本職は理学療法士であるため、やや領域が異なる研究者の方々に対する発表は大変緊張した。短時間の発表の中で最大限、他の研究領域の方にも研究の意義や内容が伝わるようなプレゼンの仕方や発表構成を心がけたが、プレゼンする相手により視点や言い回しを工夫していく必要があり、伝え方の難しさを実感した。しかし発表中・発表後には、大変有意義な質問やアドバイスを多数いただきとても勉強になった。さらに、私と同じような領域で研究する方や若手研究者の方も大変興味深い研究を多数発表しており、時間の制約がある中

で少しでも論文執筆を進めるコツや研究をする上でマインドなども学ぶことができた。これらの経験のおかげで、私自身の今後の研究に対するモチベーションをさらに高めることができたと考える。

大会中の講演を傍聴して特に印象に残ったのが、17日の教育講演である、重松良祐先生の「地域運動教室～研究と現場をつなぐ橋渡し研究」という講演であった。地域の運動教室など現場の取り組みにおいて、最新の科学的知見をそのまま適応して行くことが難しいことがある。また、場合によっては純粋な研究者と純粋な現場実践者では考え方が大きく異なることもある。そこで、現場へ普及するための研究：Dissemination research としてRE-AIMモデルやPAIREMモデルなどが紹介された。地域事業において、他自治体はどうしているか、昨年と比べ来年はどこを改善すべきか、などモデルを使用することで体系的にまとめることができ多くの実践現場で応用できるため、多くの著名雑誌が橋渡し研究を掲載している。私も職場での実践事業においてこのようなモデルをぜひ活用していきたいと感じた。

大会全体を通して、このように学会に参加することは普段の研究活動以外にも学ぶものが多かった。今後もしっかりと研究を続け、その成果を発表できるように取り組んでいきたいと改めて実感した。

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University